

【ポスターセッション】

被災した地域の「今」からソーシャルワークを学ぶ

—東日本大震災から5年目の訪問活動より—

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

三浦 剛 (東北福祉大学・1684)

東日本大震災、実践活動、ソーシャルワーク

1. 研究目的

東日本大震災以来、災害時におけるソーシャルワークとは何かが問われ、多くの支援活動経験者（社会福祉専門職等）の声を基に、ソーシャルワークの期待や課題が整理されてきた。そして、多くの研究者らが被災地での活動は「特別」なものではなく、ソーシャルワークの基本的な考え方や方法により支援が展開されていくことを述べている。報告者らもまた、被災した地域を訪問し続け、住民に求められる活動をおこないながら、「特別」ではない支援の展開に気づかされてきた。

本研究は、2015年度および2016年度に報告者らとともに被災地域を訪問した学生の活動記録を整理し、どのようにソーシャルワーク教育に結び付けることができるのか考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

これまでに報告者らは被災者の「生活」を強く意識して訪問活動を続けてきた。そのため、学生が被災地域を訪問する際も環境と被災者の生活が変化していく過程を目にできるよう1日のスケジュールをプログラム化してきた。そして、学生が実際に観て、聴いて、感じたことをソーシャルワーク教育に結びつけていくことができるのではないかと、これが今回の報告の視点である。

2) 研究の方法

2015年度および2016年度の訪問活動は、①被災した建物などを見学し地域の実情を把握すること、②継続的に活動をおこなう支援グループと合流して仮設住宅に暮らす子どもたちの遊びをサポートすることの2点を特徴に挙げて取り組んだ（活動日数；13回）。そして、参加した学生49名に活動記録の記入を依頼して提出を求めた。今回は活動記録を提出した33名を対象に記述された内容をカテゴリー化した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に則ることに加え、本研究で用いる活動記録内容がこれからの学生個人の生活や成績等に影響を及ぼさないことを依頼し時に直接説明し、結果は

個人が特定されないよう統計的な処理や分析をおこなうことで同意を得た。

4. 研究結果

1) 学生が感じた被災地の実情

被災地域を訪問して感想を【被災の衝撃】【復興の状況】【復興への願い】【震災の継承】の4つにカテゴリー化した(表1)。学生は被災した地域の様子を自身の目で確かめたことにより、「自分が想像した以上に仮設住宅があり、未だ多くの人が仮設住宅に住んでいることに驚いた」などと記した。

2) 学生が感じた被災者(地)の困りごと

学生が感じた被災者(地)の困りごとを【生活の場】【交通の便】【コミュニティづくり】【被災者の心情】【支援体制】【復興事業の行方】【震災の風化】【わからない】の8つにカテゴリー化した(表2)。学生は仮設住宅での生活が不自由であることを挙げ、「自宅で暮らしたい思いがある」と被災者の思いを汲み取りながら記していた。

カテゴリー	該当	主な記述内容
【被災の衝撃】	被害を受けた・津波の被害に遭った地域を見て、改めて災害の恐ろしさを感じた。場所に衝撃を・犠牲になった方々の辛い思いを考えると、テレビの映像で見た時受ける。	・写真や映像でしかわからなかった被災地の様子を見て、今も深い爪痕が残っており、悲惨な状況を経験した方の辛い思いを考えさせられた。 ・テレビや新聞で見た風景が目前にあり、被害の大きさを感じた。慰霊碑や残された建物、更地を見ていたたまれない気持ちになった。
【復興の状況】	復興を感じられない。	・自分が想像した以上に仮設住宅があり、未だに多くの人が仮設住宅に住んでいることに驚いた。 ・未だに復興作業が進まず、あれからずっと仮設住宅に住み続けている人を見ても驚いた。 ・被災者の生活状況はあまり変化していないと感じた。 ・復興が進んでいるとはっきり言えない状況だった。
【復興の願い】	これからの生活に期待する。	・仮設住宅から復興住宅に移って生活している人が増えているので、少し早く元の生活に戻れると良いと思った。 ・復興はしていると思うが早く地域が再生されることを願いたい。 ・狭い仮設住宅で生活をしている住民の方がより良く過ごせる環境づくりにかかわるべきだと複雑な気持ちになった。
【震災の継承】	震災の風化を防ぎ、教訓を語り継ぐ。	・変わり果てた地域の様子を見て、風化させてはならないと思った。 ・様々な物を持った人は大勢いるが、この震災を通して何かを学び、語り継ぐ。人とのつながりについて考えるようになった人も数多くいるのではないかと感じた。

カテゴリー	該当	主な記述内容
【生活の場】	仮設住宅での生活が不自由である。	・仮設住宅の狭い空間で生活せなければいけない。 ・仮設住宅で長く暮らしている。 ・自宅で暮らしたい思いがある。
【交通の便】	子どもの勉強や遊び場がない。	・子どもの遊び場がない。 ・子どもが勉強できる場所が限られている。
【コミュニティづくり】	住民の交流機会が乏しい。	・地域との関わりが薄い。 ・話を聞いてくれる相手が少ない。 ・みんなで集まれる施設が少ない。
【被災者の心情】	被災者がストレスを発散できない。	・思いを発散することが難しい。
【支援体制】	望まれる支援が少ない。	・子どもたちの学習支援のサポートがない。
【復興事業の行方】	復興が遅れている。	・復興住宅が足りない。 ・慣れ親しんだ土地で生活が遅れない。 ・ガンプの出入りで仮設住宅の敷地内が安全でない。
【震災の風化】	風化が懸念される。	・被災地以外に住む人から震災が忘れられてきている。
【わからない】	困りごとがわからない。	・何を困っている様子は無かった。 ・被災者が困っている様子を目にできなかった。

5. 考察

報告者らがプログラム化した訪問活動を通して、学生は津波被害を受けた建物を目にして被害の大きさに衝撃を受けていることがうかがえる。そして、その地域に暮らす人々や継続的に支援活動をおこなっている人々との出会いから、自らに可能な「援助」を模索していることがうかがえた。しかし、被災地域に暮らす人々の生活の一部に関わらせていただき、ソーシャルワークの援助過程を体験的に学んでいくためには、基本的なソーシャルワークの考え方や方法を改めて訪問活動の事前・事後に学習する必要がある。また、ソーシャルワーク教育に結び付けるためには教員のスーパービジョンの役割が大きいことも示唆された。

『被災地』と言われる場所には今なお支援を必要としている人々が存在する。だが、全てが東日本大震災による影響ばかりとは言い難い課題もあるだろう。いつまでも『被災地』は一括りに支援が必要な場所と捉えることなくソーシャルワークを考えていきたい。